



# 教職大学院 Newsletter No. 37

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since 2008.4

2011.12.26

## 至民中学校における教師の力量形成と、それを支える教職大学院

福井市至民中学校校長 塚田 雅洋

学校は、生徒が「学び続ける存在として」、「コミュニティの形成者として」、また、「自立した存在として」成長する場である。至民中学校では、協働的な問題解決型学習を推奨し、クラスターにおける自治的・協働的な活動や、互恵的な地域連携を核とする異学年型教科センター方式による学校運営を推進することで、生徒の成長を目指している。同時に、こうした教育の中で、生徒が協働的で主体的な学びを形成し、成長し続けるには、教師もまた協働で学び、力量形成し続ける存在でなければならないとも考えている。

ここでは、至民中学校における教師の力量形成をどのように図っているかを中心に述べ、教職大学院との関係について触れていきたい。

現在、異学年型教科センター方式を支えるための実践研究については、運営部会と授業研究部会の二重の部会組織で協働的に取り組んでいる。2つの部会は、学校を運営する上で大切にしている課題を3つに集約し、運営部会は、地域連携、生活設計、Cタイム運営（総合的な学習）を課題とする3つの小部会に、また、教科研究部会は、問題解決型学習、振り返りの場の設定、学びのサイクルの構築を課題とする3つの小部会に分かれて、教員全員が3つの運営部会のいずれかに所属するとともに、3つの教科研究部会のいずれかにも所属している。そして、これらの部会で話し合われた結果は、各小部会の部長と教務、研究主任、管理職、また、教職大学院拠点校あると同時に、福井市特別研究指定校であることから、大学院教員や福井市教育委員会指導主事を含めた企画開発委員会での調整や協議を経て、即、実践に移されていくことになる。

各部会での話し合いは、いずれも、直接、学校運営にかかわる問題を扱い、結果は翌日から実行されることから、教員の学校運営への参画意識を高めることにつながっている。しかも、協働で問題解決する場であるため、教員相互の学び合いの場にもなっている。

これら協働研究を進めるために、原則として、月曜日を研修日と位置付け、時間確保を行っている。したがって、月曜日の放課後は、部活動を中止して、運営部会や教科研究部会、また、至民中学校が推し進めている教育の根本や理念を共有するための「語ること・

聞くこと」を中心とする全体研究会と企画開発委員会を実施している。

こうした研究会とともに、教科の枠を超えて行われる内部教員に対する授業公開も力量形成の重要な場として欠くことができない。至民中学校では、授業改革を中心に学校改革に取り組んでいるが、そのために授業研究の日常化も図っている。日常化を図る上で重要な点は、気軽に授業公開できる仕掛けである。公開に当たり、指導案の作成を求めない。また、授業研究会は時間確保が難しいこともあり、パソコンの共有フォルダに「参観記録」を書き綴るといった方法も取り入れている。

このように、至民中学校では、教師の力量形成の場を日々の職務遂行の中に見いだしている。「学びと生活の融合」という本校研究主題は、生徒の生きる力の育成を目指したものであるが、そっくりそのまま、教師の力量形成の主題でもある。

そして、これら日常の取組を理論的に支え、価値付け、スパイラルに向上するための様々な糸口や示唆を与えてくれる存在が、我々教員と共に至民中学校の課題に協働で取り組む教職大学院の教員である。また、インターンとして至民中学校で長期実習を行っている院生の存在も、教員にとって良い刺激となっている。

これら協働の関係を更に深め、本校にかかわる者すべてが成長できる、本来の「学び舎」として、至民中学校教育の一層の充実・深化を図っていきたい。

### 内容

- 至民中学校における教師の力量形成と、それを支える教職大学院 (1)
- 拠点校研究集会報告 (2)
- 11月合同カンファレンスを終えて (4)
- 連携校だより (7) フォーラム参加報告 (10)
- 英訳プロジェクトの紹介 (12)
- 教師教育ネットワーク・交流のひろば (14)
- ラウンドテーブル予告 (15)

# 拠点校研究集会報告

## 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校教育研究集会

子どもの現状を把握し学びを創造する ～ICFを通して多角的に考える～

教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属特別支援学校インターン  
北條 哲理

私は、今年4月から福井大学附属特別支援学校の高等部A組にインターンとして入っている。これまで、学部時代から、教材研究や教育実習等で、附属特別支援学校にお世話になっており、それぞれの機会に自分なりに子どもたちの学びを考えてきたつもりだった。そして、研究集会などにも毎年参加しており、附属特別支援学校の子どもの学びや成長についても知っているつもりでいた。しかし、今回、縦割り研究会や学部研究会に参加させていただき、改めて、子どもたちの学びがどのように作られているのかということを知ることができたと思う。

私は高等部に所属しているが、今回の研究集会では、縦割り分科会で第2分科会に所属することになったため、中学部の焦点事例「主体的な



『活動・参加』を促す支援を考える ～ICFの考え方を授業実践に生かす～」についての研究会に参加させていただいた。ICFとは、「International Classification of Functioning, Disability and Health（国際機能分類）」の略である。第2分科会では、ICFの本来の目的は、「人間の生活を総合的にとらえることにより、その生活レベルを上げていく」ことであると共通理解をしていた。また、一人一人の「活動・参加」のレベルを上げることで、「心身機能・身体構造」なども一緒にレベルアップするという共通理解を持った。その上で、先生方は、「何をしたいのか」という子どもの思いやその子に「どのようになってほしいのか」とい

う周囲の人の思いに着目すること、さらに、本人の「個人因子」のプラス因子を生かすこと、学校の中の「環境因子」を人・物・時間の3つと考え、これらを授業の中で調整し、設定していくことに取り組んでいた。

今回、ICFについて学ぶことによって、私自身が子どもとかかわっていく中で、子どもたちの現状を整理するのに活用することができるようになったと思う。子どもの行動の背景にある理由を、「個人因子」「環境因子」などを多角的に考えることができるようになった。その上で、支援の方向性を考えることができるようになってきたのではないかと思う。

また、今回の研究集会では、ポスター発表の時間を11:30～12:00と12:30～13:00の2回取ることで、自分の興味のある分野について、少しでも多くものを持ち帰ってもらおうと試みた。この試みはとても好評で、参加して下さった他校の教員、学生、親御さんから、詳細な質問を受けた先生方もたくさんいたようだった。実際に私が見せてもらったポスター発表の場では、親御さんが事例に出てきている子どもの様子を事細かに聞く様子や、現職教員が実践について自分の実践と比べながら質問をしているということがあった。このように、自分の興味があることについて、より深く話し合えるポスター発表はとても有意義なものだったと思う。私自身も含め、学生にとっては、よりリアルな話を聞けるととてもいい機会だったと思う。

今回、インターンの立場で研究集会に参加して得たものは、附属特別支援学校の「12か年教育」の考え方やその実践内容であり、また、ICFを通して、子どもたちとのかかわりの中でいろいろな要素を双方向に作用させ、生活の質を上げていくことの重要性である。今回学んだことを、今後のインターンシップで生かし、さらには、教員になって子どもたちとのかかわりの中で実践していきたいと思った。



## 坂井市立丸岡南中学校自主研究発表会

教職専門性開発コース2年／坂井市立丸岡南中学校インターン

林 克磨

11月17日に丸岡南中学校の自主研究発表会が行われた。私は、昨年度に引き続き、インターンシップの一環で丸岡南中学校のメンバーの一員として携わらせていただいた。

本年度も、昨年度と同様に、異教科の教員同士がグループを組んで授業研究を行っている。私は、昨年度の最初のころは、自分の専門外の授業を研究していくことに不安を感じていた。知識の薄さから、話し合いに参加できないと思ったからだ。しかし、先生方に交じって検討を重ねていくうちに、「生徒にこうなってほしい」という情熱が伝わってきた。この共通の思いが異教科グループを機能させていることに気付かされた。そして、理想の生徒像を語り、実現していくためには、日々の生徒とのかかわりを大切にしなければならない。つまり、異教科グループによる研究は、各教科の先生方が日々の中で、様々な分野で学ぶ生徒と接することで得られた、多様な視点を持ち寄ることで成り立っていると考える。その結果、誰か一人のリーダーが研究を押し進めるのではなく、先生方一人一人が協力し合って研究を進めていけるのが丸岡南中学校の特徴だと感じた。丸岡南中学校の研究は、正に、全生徒と全教員あつてのものだと思った。

また、私は、丸岡南中学校の自主研究発表会は、研究の成果を発表する場ではなく、日々の研究の様子を公開するという方針に近いと思う。本年度は、毎月、「研究の日」を設け、各グループで公開授業を行い、全員で見合っている。当然、その間は、授業クラス以外のクラスは自習になる。そう考えるとこれは大胆な試みではないだろうか。授業の時間を減らしてまで研究に充てるには決意が必要だからだ。目先の成果だけを求めるならば、この方法による成果は小さいだろう。しかし、長期的に全教員で授業公開を継続していくことで、生徒だけでなく教員も含めた「学び合う環境の創造」に近づいていった。正しく、研究会での発表に向けた研究ではなく、生徒のために日々の研究の積み重ねを大切にしているのだと感じた。私はメン

バーの一員としてかかわる中で、このような研究に対する姿勢が教員の一体感を生んでいるのだと実感した。

私は、自主研究発表会の研究授業では、社会科を参観した。第1学年の歴史分野で、「鎌倉幕府と室町幕府では、どちらがよい政治を行ったか」という課題であった。班内で「文化」や「将軍の支配力」などの観点から評価していき、最後に、よい政治を行った幕府を総合的に判断する活動であった。私が参観した班では、「産業の発展」という観点で議論を展開していた。「定期市の開催数が増えたから室町が発展している。」という意見と「定期市が作られた鎌倉の方が評価できる。」という意見があった。「発展」という一つの言葉が、生徒たちの中では「発達」と「発生」という二つの意味に分けられた瞬間だった。この小さな違いが互いの評価にずれを生じさせる結果となり、結論を出すことができなかった。しかし、私は、この議論は意味のあるものだったと思う。相手に意見を伝えようと根拠となる資料をその場で教科書などから調べて見せようとする姿は、生徒自身でしか開けない学びの質を高めていたように感じた。また、授業後の研究会では、研究授業が3教科ということもあり、様々な教科の教員が参加していた。そのため、分科会の場でも、異教科グループが成立する形となった。そして、その場では、他校から来られた専門教科外の教員でも発言しやすい雰囲気が漂っているように感じた。それまでの異教科グループによる積み重ねにより得られた、生徒の学びを中心に話し合うという視点が明確化されたからだと思う。

丸岡南中学校は校舎の造りに注目されることが多く、特別扱いされることも少なくないと思う。しかし、実際に研究している内容は決して特別ではない。私は、今回の自主研究発表会に携わる中で、他の教員と協力しながら学び続ける教師でありたいと改めて思った。

## 福井大学教育地域科学部附属小学校教育研究集会

教職専門性開発コース1年／福井県立藤島高等学校インターン

前田 恵子

今回、福井大学附属小学校の教育研究集会に参加して、改めて、「教師としての在り方」について考えさせられた。子どもたちの前に立つだけなら、誰にでもできる。しかし、子どもたちが学びたいと思う気持ちを高め、一人ではなく、仲間と共に高め合うことのできる場を築き上げられる教師であることは、容易では

ない。研究集会では、附属小学校の教師が子どもたちに向き合う姿、考えられた授業、生身の児童の姿、それらを受けてのシンポジウムと、見どころがたくさんあった。どれも私にとっておもしろく、考えさせられた1日となった。

全体会では、協働の意味や教師としての視点、授業

の見取り方について話をされていた。協働して学び合うことで、個の学びの限界を超えることができる。そのために、教師は学び合える場を作り、共有させる。授業後は、子どもの言葉や行動・表情などに注目して、子どもの学びを語り合う。当たり前のことかもしれないが、忘れていないか、当たり前になり過ぎて、相手に押し付けたり、無理な期待を掛けていたりしないだろうか、自分自身の考えと向き合う時間になった。

公開授業と分科会は、2サイクル行われた。ここでは、参観した4年の食育の授業を取り上げる。シンポジウムで富山大学教授の松本謙一氏も述べていたが、この授業は、栄養教諭がT1となっていたことが特徴である。授業の動機付けに、謎の封筒が使用されていた。授業前に子ども一人一人に配布され、何が入っているのか、いつになれば開けられるのかと、子どもたちのわくわく感が参観している私たちにも伝わってきた。授業の前半では、この封筒は使用されない。人形劇や野菜の実物を用いて、栄養について考えていく。忘れたころになって、ようやく封筒が使われる。「開けましょう」の声によって開けられた封筒の中には、自分たちが食べたいだけ入れてきた給食の写真が入っていた。「わー!」「自分のや!」「俺のだ!」と開けたとたんに、クラス中に声が広がる。開けることのできた喜びの声と同時に、「これ多過ぎるね」「好きなばかりだ」という声も聞こえてきた。知識として学んできた栄養が、一気に、自分たちの普段の食事へと応用される。イメージしにくく、食の領域の中でも難しい分野である栄養の授業が、ここでは、子どもの実生活とうまくリンクしていたのではないだろうか。

分科会での協議を通して、多くの課題も見えてきた。今の授業の姿が完璧であったとは言えないかもしれない。しかし、知識だけを押し付けられる授業とは

異なっていて、子ども自身が自分たちの食生活を客観的に見つめ、他の子どもと話し合う。発表では「何て言えばいいかわかんもん」や「もう分かんないよ」という声が出ていた。このような場面するとき、子どもたちは一生懸命考えているのだと私は思う。分からなくていい。分からないと感じ、何かを探そうとする必死な子どもの姿、分からなくて困っていると周りの人が、助け船を出してくれる、それこそが学びなのではないだろうか。この授業で分からないと感じた子どもは、きっと、今後、給食の時間や食事のときに、ふとこの授業を思い出すだろう。それでいいと思う。シンポジウムで松本氏がおっしゃっていたが、子どもたちは、現在だけを生きているのではない。過去があって、現在があって、未来がある。未来につながっていくような授業を創っていくことが必要なのではないだろうか。

子どもの姿を、声をしっかりと教師が受け止め、一つ一つを子どもの成長につなげていける教師を目指していきたいと強く思った。



## 11月合同カンファレンスを終えて

教職専門性開発コース1年／坂井市立丸岡南中学校インターン  
永田 恭子

今回の合同カンファレンスは、初めての予備日程参加だった。テーマが「他校の研究から学ぶ」ということで、前日に附属小学校で行われた研究集会の話が話題の中心となった。私はインターンの日だったために参加できなかったが、先生方のお話を聞いていると様々なことを学ばれてきたようだった。その中で、特に印象に残っているのは、公開授業の後に行われる分科会についてである。研究集会には学部生のころから何度も参加していたが、毎回の分科会を少しづつ思っていた。私たち参加者と、授業者・協力者が完全なる対面式だったからである。まるで記者会見のようだった。いつも他校の教員や院生の方が発言するばかりで、未熟な私はそれを聞いてひたすらメモを取るだけ。大学院に入ってから、いろいろな学校の研究集会に行くようになったが、そこで驚いたのは分科会の形

式だった。それは、参観者・研究校教員で小グループを作り、授業について意見を交わし合うというものがある。それまではほとんどが聞く側として参加していたが、発言し、意見交換する者として参加したものだから、最初は「何か突拍子もないことを言ってしまうか」「幼稚な意見だと思われぬか」など変な緊張と不安に駆られていた。しかし、何気なく気付いたことを発言するだけでも、それを他の教員が拾って違う側面から意味を見いだしてくれたり、同じ場面に対する複数の意見をすり合わせたりすることで、どんどん深められていくことに私は分科会の意味を改めて感じたように思う。

カンファレンスでも、この附属小学校の研究集会で初めて小グループ協議形式をとったことが話題となり、これまでの対面式分科会との大きな違いに気付い

た。その形式をとった効果か、この日は、普段、ほとんど発言することのない学部生から思わぬ良い意見が出るという場面があったそうだ。単に、やり取りを聞いているだけでは学びが一方的なものになってしまうが、参加者が意見を出しやすい場の設定をすることで、ちょっとした気付きがグループ協議を経て深まり、その日の学びとして自分の中に落ちていくようになる。「来た人が学んで帰れる研究会だね」というコーディネーターの教員の言葉がとても印象的だった。

私がインターンを行っている丸岡南中学校でも、小グループ形式の分科会を行っており、さらに、あらかじめ1つの班について生徒の学びを見るよう参加者に協力をお願いしている。それにより、その後の分科会では班の生徒一人一人の学びの道筋を丁寧にたどって

ることができる。私もそのように参観することで、生徒がどのような考えを持って発言したのか、どの場面で興味・関心を持ったのかなど、表情からも読み取ることができた。さらに、普段、学校にいるからこそその気付きもある。この日に見た授業はちょうど私の担当クラスで、学校の中では一番多くかわりのあるクラスだった。そのため、生徒一人一人の性格や普段の取組の様子を授業につなげて見るることができた。じっくり一部分を見ていると、全体を見ていると分からない気付きがある。

これまで全体を見ていた私は、「子どもの学び」ではなく、「教師の教え方」を見ていたのではないかと思う。子どもの学ぶ様子から授業づくりをしていこうと考えている私は、これからも子どもの学びをしっかり見ていこうと感じた。

## スクールリーダー養成コース1年／福井県立福井商業高等学校 福岡 利夫

澄み切った秋晴れのもと、11月合同カンファレンスが始まった。私は、この4月まで、高等学校の枠を超えて公開授業研究に参加したことがなく、各院生がどのような視点やねらいを持って他校の研究会に参加され、それをどのように自校の取組につなげていくのかを聞くことができると楽しみに参加した。

初めに、安居中学校と啓新高等学校の2人の院生（現職教員）から、他校の公開研究会（主に、至民中学校と丸岡南中学校）での印象と、それを通してどのような変化があったのかについての報告があった。目的に合った校舎の配置は、学びたいもの、学びを支える教師との関係をより緊密にする。さらに、学びが学校生活と密着したものとなり、学校に来ることが楽しいと感じる。安居中学校では、生徒自らが他校の生徒の学びを参観することに意義があると考え、全校の約2割の生徒が参加し、至民中学校のクラスター長との交流も図り、刺激を受けた。子どもは他校の良さを素直に受け止め、至民中学校での形式を取り入れて生徒が自主的に取組めるように生徒総会を変えていった。また、啓新高等学校では、多くの教員がグループ学習を取り入れるなど、教員の意識変化も現れている。子どもと共に教師も学び、学校づくりに参加していく仕組みを作ることが大切であることは、どちらの学校にも共通していた。

次のクロスセッションでは、これまでの至民中学校や丸岡南中学校での取組が学校に定着し、リーダーの思いが生徒全体に広がりを見せていることを認め合った。年上の人や教員とかかわることに抵抗がなく、質問も気軽にできる関係ができている。教員も清掃の前に黙想し、黙って清掃を行い、一日の振り返りを生徒

と共に取り組んでいる。このような、生徒・教員の一体となった取組が定着につながると感じた。さらに、いくつかの質問も挙げられた。考えさせ、活躍させる授業展開の中で、リーダーを上手に育てているのは確かである。しかし、1時間の授業の中で話さなくて済んでしまっている生徒も見られた。言語活動が難しい生徒にどのように支援し、自分の思いを伝える経験をさせるのか、リーダー以外の生徒の居場所を地域との活動の中でどのように見付けるのか、通常学級にいる支援が必要な生徒へはどのように配慮しているのか等、中学校に入ってから成長できた実践についてもぜひ伺いたいなど、熱心な議論が展開された。最後に、一斉指導とグループ学習での教師のかかわり方や立ち位置等、私が現在抱えている問題についても貴重な意見をいただいた。

本校においても、今年度から、互いの授業を見合う公開授業が始まった。新たな試みに、授業者や参観者はどう受け止めたのだろうか。生徒は刺激を受け、緊張した雰囲気の中で学びを深めることができたであろうか。授業者と参観者が互いの良さを認め合い、新たな発見が生徒への学習意欲に発展し、「三方よし」の関係を築いていきたい。そのためにも、同僚教員や生徒からも多くの意見を聞き、他校での取組状況も交えながら、継続して取り組むことが肝要である。そのことが、安居中学校や啓新高等学校のように同僚から良きアドバイスをいただける環境にもつながっていく。これまでの実践を振り返り、多くの課題が浮き彫りとなった。しかし、同時に、改善に役立つ新たな施策や発想を得ることができた刺激と驚きの一日であった。

## スクールリーダー養成コース2年／福井市安居中学校 見崎 洋之

### 1 生徒が参加するまでの経緯

至民中学校の研究会の要項を眺めながら、午前中の日程に目を移すと、「クラスターについて語る」という言葉が目飛び込んできた。これまでもクラスター長が歓迎のあいさつをするなど、生徒と共にある至民中学校の公開研究会であったが、今年度は更にレベル

を上げ、自分たちの取組について語る「全校生徒集会」をまるごと公開しようということらしい。かねてから、至民中のクラスター活動の良さを感じていた私は、「これこそ安居中の生徒たちに見せる価値あり！」と思い立ち、動き出すこととした。

生徒会担当の加藤教諭は、(新)安居中学校づくりに

生徒も参画させようと考えており、もちろん賛成してくれた。生徒会長や副会長だけではなく、委員会の委員長たちも参加させようという思い切った提案であったが、本校の校長も、たいへん価値のある取組として承認して下さった。

また、至民中学校の高間先生に構想を伝えると、「安居中の生徒が来てくれれば、クラスター長のモチベーションも更に高まるので、ありがたい。」との快諾を得られた。

生徒たちは予想以上に前向きで、「多数の参観者の前で感想を求められるかもしれないよ。」と伝えたが、全く臆することなく目を輝かせ、総勢13名が参加することとなった。

## 2 研究会当日

集会まで少しの時間があつたため、授業を参観させていただいた。どの教科の学習も協働の学びが感じられ、「僕たちのクラスはなかなか意見が言いにくい雰囲気だ。机の配置を変えてグループ学習がしたい。」などと、我々に語り掛けてくる生徒もいた。

アリーナ内が独特の雰囲気に包まれて、いよいよクラスター長たちによるプレゼンテーションが始まった。大勢の参観者の前でも堂々と発表していたクラスター長たちの姿を見て、「あのグリーンクラスターの人すごい!」「先生!クラスターやりたいです。」「レッドクラスターの『紅の札』、うちでもやりましょう。」といった思いを次々と語り出す生徒たちだった。

## 3 生徒たちの変容

生徒たちが帰校後に書いた感想からは、「これまでの生徒会活動ではいけない。もっと上がある。」ということを実感したことがうかがえた。そして、至民中学校の取組から素直に学び、自分たちが(新)安居中学校づくりにも前向きに参画していこうとする動きが高まってきた。

学級委員会では、グループ学習のスタイルを本校でも積極的に取り入れてほしいと考え、そのメリットやデメリット、学習スタイルの要望などについて生徒や教師にアンケートを取ろうとしている。生徒総会自体も大きく変わり、執行部と委員会の委員長が一つになって簡単なパフォーマンスも含めた掛け合いを自分たちで作るようになった。また、マイクを持って会場を歩き回り、要所要所で意見や感想を求めていった。これらのすべては、至民中学校で印象深かった生徒たちの姿がベースになっている。

## 4 つながり合って育つ学校

我々は、(新)安居中学校の目指す姿「共有ビジョン」を構築し、「他中学校との連携」を重要な取組の一つとして考えてきたが、ようやくその第一歩が踏み出せたわけである。思い返せば、夏季休業中から数回にわたって行った「共有ビジョンの構築」は、遠回りのように思えたが、我々の実践を支える価値あるものを生み出した。

全体研究会の最後で、藤島中学校の加藤校長が、「安居中学校の生徒が来ていた。これはいいなあと思った。」「今日の生徒集会を見せる。その前後で学校づくりを考えさせるといい。」といったことを述べられていた。外部の方から見て、今回の取組を価値あるものととらえて下さったことに感謝したい。そして、加藤校長が示されたとおり、至民中のすばらしさに触れた生徒たちは、たくさんのことを吸収し、(新)安居中学校づくりへの参画の意欲を高め、実践を積み重ねようとしている。私としても、この生徒たちの学びを通して、「教師と生徒の協働の大切さ」や「生徒の可能性の引き出し方」を学んだと実感している。

今後も、生徒の主体性を更に大切にしながら、(新)安居中学校の目指す「つながり合って育つ学校～社会参画型学力の育成～」に向けた教育活動を展開していきたい。



感想・お礼を述べる安居中学校生徒会長



拍手を贈る至民中学校クラスター長

## 協働体としての学校

啓新高等学校の川合です。「他校の研究に学ぶ」という題目のミニ講義で話したことを書かせていただきます。

今年度は、至民中学校と丸岡南中学校での公開研究会に参加させていただきました。両校とも教科センター方式を取り入れた福井県でも最先端の教育を実践

## スクールリーダー養成コース2年/啓新高等学校 川合 浩介

している学校ということで、教職大学院で学ぶ私にとって、これからの教育についての方向性を示してくれる良い経験となりました。

最初の印象は、両校共に校舎がとてもすばらしいということでした。新しい校舎は奇麗で、何よりも十分なスペースがあつてとても広いと感じました。また、

その校舎をうまく活用してある点に深く感銘を受けました。教科センター方式でのクラスターやスクエアに適した教室配置になっており、教室のすぐそばのオープンスペースに学びに関する資料や教具などが配置され、教科ごとの職員室も教室のすぐ近くにありました。どちらの学校も校舎の隔たりがなく、離れた教室で子どもたちがどんな活動をしているのかを遠くからでも見通せる環境にも驚かされました。こういったことが教室だけではなく職員室にも当てはまり、さらには、校長室でさえも外から丸見えであったことが印象的でした。学校全体が私的な空間ではなく公の空間であることが、学校としての一体感を生み出すことにつながっていると感じました。また、学びが、常に、子どもたちの身近な空間にあり、学校での生活の一部となっていることが、学びと生活の融合を実現するものであることを体感できました。

次に、授業についてですが、両校とも、教師から子どもたちへの一方向的な知識の伝達ではなく、子ども達自身に考えさせ、子どもたちの活動を中心とした授業が展開されていました。私は理科の授業を主に観させていただきましたが、両校とも、教師が材料を与え、子どもたちが課題を探究することを通して、お互いにコミュニケーションを取りながら、学びを深めていく過程は、私自身の今後の授業作りのため大変参考になりました。授業を参観する上での視点をいただけたことも貴重な体験でした。丸岡南中では、授業の前に参観者についてもグループ分けがされており、主に見るべき子どもたちが割り当てられていました。そのグループの子どもたちをずっと観察していくことで、子どもの思考に沿った参観ができ、その後、同じグループを見合った教師同士で振り返りができたことは授業研究での新しい視点を与えてくれるものでした。

両校の授業とも、子どもたちは意欲的に参加していましたが、このことは授業以外のところでも見ることができました。丸岡南中では丁度私が学校に着いた時が、「ひとり立ち清掃」の時間でした。放送で音楽が鳴る中で、子どもたちは一言もしゃべらずに静かに集中し、目配せをしながら、お互いに役割分担をして

清掃を行っていました。そんな中でも、目が合うたびに子どもたちは会釈をして迎えてくれました。至民中でも同様に、たくさん子どもたちが自分から声を出して積極的にあいさつをしてくれました。後方からでもあいさつしてくれるので、こちらも返すのが大変なほどでした。また、至民中の全体会での生徒集会の中でも子どもたちが中心となり、自分たちのクラスターについて良い点も悪い点も含めて、自信を持って紹介してくれたことには驚かされました。子どもたちは、元気で明るく社交性に富み、自分たちで行動する意欲や積極性にあふれていると感じました。

参観させていただいた両校の子どもたちが、なぜこのように育つのかを考えてみると、学校全体が子どもたちにとって安心できる空間になっているからではないかと考えました。常に、教師も子どもたちの思考に寄り添い、視線を合わせて子どもたちと同じ方向を向いて共に活動している印象を強く受けました。教職大学院で学ぶ協働というものが、私が考えていたような教員間だけのものではなく、子ども・地域をも含めた学校全体のものになり、学校が一つの協働体として機能しているということです。家庭や地域の教育力が弱まっていると言われていた中で、それを取り戻す学校の姿を見せていただいた気がしました。現在の学校に求められているのは、家族と社会の仲を取り持つ協働体としての存在なのかもしれません。

今回の公開研究会には啓新高等学校からも、授業研究会を中心に10数名の教員が参加させていただきました。啓新高等学校の教員の中にも、学校をより良い方向に変えていこうという意識が強まってきています。授業研究会のメンバーにも、探究型の授業とはまだまだ呼べないまでも、授業にグループ学習を取り入れるなどの動きが少しずつ見えてきています。そんな中で、新しい教育を実践している具体例となる両校の取組は大変貴重なものです。両校の教員の皆さんには、こちらが学ばせていただく側であるにもかかわらず、本当に丁寧に対応していただき、深く感謝いたしております。ありがとうございました。

## 連携校 だより

### 鯖江市立待小学校

スクールリーダー養成コース1年

岩堀 美雪

本校は鯖江市北西部にあり、近くには日野川が流れていて自然が豊かで、全校児童591名の小学校です。「た・助け合う子、ち・知恵のある子、ま・まごころのある子、ち・力いっぱいがんばる子」という校訓の下、児童は元気に学校生活を送っています。また、江戸時代の文豪、近松門左衛門の生誕の地が校下にあります。その影響もあって、地域学習では近松門左衛門の里を取り上げています。公民館活動の一つとして人形劇ク

ラブもあり、約30名の児童が毎週練習に励んでいます。和泉市いぶきの小学校とも交流があり、今年の夏休みにも人形浄瑠璃クラブの児童が来校し、交流会を開きました。

教師集団の取組としては、今年度は、白川文字学の研究拠点校となり、1～6年のそれぞれの学年で公開授業が行われました。その際は、一学年3クラスの利点を生かして取り組みました。具体的には、次のような流

れです。まず、授業者が立てた指導案をもとに他のクラスで授業をします。→指導案をもう一度検討し直します。→さらにもう一つのクラスで授業をします。その様子を校長や教頭をはじめ、研究部会の教員が参観に来て、アドバイスし合います。→一番は、それを更に練り直した指導案で授業を行います。このような事前授業や研究会は、指導主事訪問での参観授業でも行います。

このように授業を公開し、話し合って練り直すことは参加している者にとってもたいへん有意義なことだと感じます。お互いの授業を気軽に見せ合える雰囲気はとてもすばらしいと感じています。また、研究については、「研究紀要のための研究ではなく、本当に自分たちの身になる研究をしよう！」を合言葉としています。研究会では、授業に役立つちょっとした取組を紹介し合ったり、授業に使った自作のワークシートを他の学年にも紹介したりしています。

このような立待小学校に私が赴任してきて、4年が過ぎようとしています。隣の越前市から47歳で鯖江市に異動してきました。顔見知りの方はいない状態の心細い私に対して、同僚の皆さんはとても温かく接してくれました。私は、「パーソナルポートフォリオを使用して、子どもたちの自己肯定感を高めるための実践の拡大とカリキュラムの開発」というテーマで教職大学院に通っていますが、赴任1年目の夏に、校内研修をさせていただく機会をいただきました。まさかそんな機会をいただけるとは思っていませんでした。とても感激したのを覚えています。その後、同学年だけではなく、他の学年にも実践は広がりつつあります。（今年度は、私が学年主任をしている3年生と、2

年生、4年生、6年生がパーソナルポートフォリオの実践に取り組んでいます。）しかし、5月に授業を公開させていただいた際のアンケート結果から、取組を躊躇する原因として「いい取組だとは思いますが、時間が無い。」と考える教員が多いことも分かりました。年間のカリキュラムの開発を行って、誰でも取り組みやすい形にしていくことが今後の課題であると思っています。

12月には、フランスからのお客様をお迎えしての授業となりました。授業が終わった後に同僚教員から、「私、来年は絶対やってみるって思った。」との言葉をもらいました。たいへんうれしかったです。続けること、できるだけ授業を公開していくことの大切さを肝に銘じて今後も歩んでいきたいと思っています。



## 越前市武生第一中学校

スクールリーダー養成コース1年

澤崎 秀之

年の瀬や年の初めは、一年間を振り返り、新しい年に向けて決意を新たにしたい節目になっているが、中学校では、この時期はなかなかハードな時期に差し掛かってきている。高等学校進学や就職に向けて、生徒の個別面談や保護者を交えての三者面談などが放課後、あちこちの教室で繰り返される。当事者である生徒はもちろんのこと、保護者も、また、担任や学年担当も気が気ではない。私も、毎年、面接の練習や口頭試問の練習の手伝いをするが、その際に生徒に必ず聞くことがある。それは、「一中はどんな学校ですか?」と。面接の練習場面なので、日ごろ、愉快にいろいろと話をしてくれる生徒も、さすがに構えて答えることになる。「元気なあいさつができる学校です。」「生徒が活発な学校です。」「〇〇部や□□部が強い学校です。」「生徒と先生が仲の良い学校です」などなど。その中で必ず生徒が挙げる答えは「元気なあいさつができる学校です」という答えである。生徒にとって自慢できる部分なのであろう。本校教員も、生徒のあいさつには気を配っていて、積極的に声掛けも行っている。そんな自然な感じが生徒にも伝わり、毎年の答えにつながっているであろう。一朝一夕にできることではないので、本校の伝統として大切

にしていかなければならないとも考えている。ところが、「元気なあいさつができる学校です」と答えた生徒に、今度は意地悪く「では、一中はどんなところが足りないですか?」と質問すると、しばらく黙ってしまい、考えに考えた挙句、差し障りの無い答えをする生徒がほとんどである。もちろん、面接なので、それで十分なのであるが、練習場面が済んだ後に生徒たちに、本当はどんなところが足りないと思っているの?と突っ込むと、実に様々な答えが返ってくる。その答えの内容が問題なのではなく、生徒たちがちゃんと自分たちの学校のことをしっかりと感じ取ってくれていることがうれしい。学校が生徒にとって魅力的な存在になるためには、良きも悪きも、生徒自身が「自分たちの学校」という立ち位置で生活してくれることが一番大事である。良いところは伸ばし、不足する部分は鍛えたり、補ったりしていこうとする意識が学校を良くしていく土台になる。

では、教員はどんな立ち位置で臨んだらよいのだろうか?平成23年度の武生第一中学校は、新しいことに取り組むスタンスではなくて、今までのものをより充実させる方向で研究を進めている。学校全体で「魅力ある学校づくり調査研究事業」(H22・23文部科学省

国立教育政策研究所からの研究委託)を進めている。この研究は教育の様々な領域で「未然防止」の観点から生徒の様子をとらえようとするもので、主に、不登校の未然防止にかかわる研究である。武生第一中学校は、生徒数が約700名、職員数が約50名で、越前市では最大規模の学校。各学年の生徒が230名前後おり、学校行事や学年行事では事前の準備から事後の取りまとめまで結構な活動を要する。こうした学校の中で不登校の研究のみに止まらず、授業内の生徒指導や教科指導での支援の仕方などにも「未然防止」の考えを波及させていく取組を行った。この視点から学校の組織を見直すことは大変意味のあることで、教職員全体が協働して取り組むことで生徒にも還元できることが多くあった。(私自身が教職大学院での学びの中から視点を変えたり、視点を波及させたりすることの重要性を痛感している。)ほんの一例だが、本校教員にお願いして取り組んでいただいていることがある。学級に生徒は30名前後いるが、担任は一人である。一人の担任がすべてを抱えるにはやはり限界がある。共通理解を図るという概念は以前からあるが、ではどうやって共通理解を形として実践するか。そこが一番大切な部分である。そこで、二つの側面に分けて物事をとらえるようにした。一つの側面は、『一人一人の生徒をできるだけたくさん教員の目で見ること』。担任の目、教科担任の目、学年主任の目、学年の教員集団の目、部活動顧問の目、養護教諭の目、生徒指導主事の目、カウンセラーの目など、様々な立ち位置の教員から生徒のいろいろな面を見てもらい、気付いたこと(良い点も不足している点も)や気掛かりなことを共有フォルダに入力して連絡し合うことにしている。話し合いの時間がなかなか確保しづらい中、学校の生活時間の中でコメントとして目にするができる貴重な資料になっている。資料が大切なのではなく、その資料を様々な教員が見て、様々なかかわり方をしていくことに意味がある。この資料を単なるデータとしてとらえるのではなく、リアルタイムに近い観察記録として学年会やケース会議、職員会議などで取り上げている。

もう一つの側面は、『一中で学習することの良さを生徒が実感できる教育課程を工夫すること』である。一例としては、一昨年度から総合的な学習の時間(武生第一中学校では、「創意の時間」と呼んでいる。ちなみに、「創意」というのは、本校の生徒玄関の前にある小高い丘の「創意が丘」という名前から取っている。この丘には、「♪この木、何の木、気になる木…」のような、見事なケヤキの大木がたたずんでいる。)を3年間のスパンでもう一度組み直したことである。進路学習や福祉教育、人権教育などの特別活動で扱われる部分やその土台にもなる道徳の授業や教科の授業との絡み、兼ね合いなど、今まで以上に3年間のスパンを意識してスムーズな流れで、中学生の時期に大切な学習を身に付けていけるよう工夫したものである。生徒一人一人の良さも不足する部分も、学校の教育課程の中で磨いたり補ったりすることになる。だから

からこそ、生徒が取り組む活動の裏側の構成を教員は意識しなければならない。教員がそれぞれの立場から話し合い、協働し合い、生徒が活躍できる舞台を整え、そこで生徒が力いっぱい活動する。そんな時間が学校の中には必要である。

1年生では次のような充実が図られた。(図で示すと)

<b>【校訓】 自律 敬愛 創意</b>		
<b>【1学年】 いのちのぬくもり 体験学習</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>★いのちのバトン (支え合う命の授業)</li> <li>★助産医さんからのお話 ★妊婦体験</li> <li>★先輩パパ講演会</li> <li>★育児模擬体験 ★赤ちゃん抱っこ実習</li> <li>★「一途」さんのコンサート</li> <li>●準備にかかわる依頼のお手紙や御礼のお手紙(教科の授業とタイアップ)</li> <li>●それぞれの活動後の振り返り(美術の体験画・国語の作文・社会の福祉にかかわる学習)など…</li> </ul>		
<b>【総合的な学習】</b> 系統的な進路学習 (職業調べにつなげる)	<b>【特別活動】</b> 主体的な進路の選択と将来設計	<b>【道徳】</b> 「生命尊重」 「自己の生き方」

この「いのちのぬくもり体験学習」は、2年前までは2年生で実施していた一連の学習であったが、より一層の学習効果をねらい、1年生に繰り下げて行っている。今年度は、父親の視点も取り入れることにした。先輩パパの講演会では教職大学院の富永先生に先輩パパとしてお話をいただいた。パパの視点は新鮮で生徒にもたいへん好評であった。同じような学習でも、学年や時期を入れ替えたり、流れを変えたりすることで今の生徒の実情に合わせた教育が行える。

学校には生徒一人一人が生活して集団を作り上げているが、一人一人を見るには、個として見る立ち位置と全体の中で見る立ち位置があることを教員にも実感していただいた。全体の流れの中でまた、一人一人の生徒に立ち返って生徒とかかわっていく。まだまだ、工夫と改善が必要だが、生徒にとっても教師にとっても、「自分たちの学校」にしていけるよう、自分たちの学校の魅力を生徒も教員もはっきりと口にできるよう実践を続けていきたい。

# フォーラム参加報告

## 大阪教育大学「第11回スクールリーダー・フォーラム」に参加して

福井大学教職大学院 津田 由起枝

11月19日(土)、大阪教育大学で開催された「第11回スクールリーダー・フォーラム」に、本学教職大学院の森・川上両氏と共に参加した。フォーラムの開催直前に、9月の教師教育学会の際にお会いしてお話しをお聞きした、大阪教育大学大学院の院生の方たちと食事をしながら、更にいろいろなお話を聞くことができた。院生のほとんどが勤務先の学校での仕事を終えてから大阪教育大学に通って学びを深めておられ、大阪府内はもとより、奈良県から来られている教員もおおいであった。「どんなに多忙でもここに来るとかえって気持ちが楽になる」という言葉がとても印象的であった。

このフォーラムは、2002年に大阪府教育委員会及び大阪市教育委員会と大阪教育大学が連携協力の協定書を締結し、持続的な基幹事業として展開されている合同プロジェクトで、「学校づくりの在り方について実践者・研究者・政策担当者が一堂に会して研究交流し、より豊かな学校教育の在り方を考える」「学校づくりの実践例を研究協議の場に提示して多様な視点からその成果と課題を見定めるとともに、他校への応用可能性を検討する」ことなどをねらいで開催されている。

当日のフォーラムは、「基調講演」「ピアノとチェロの共演」「シンポジウム」という流れで進められた。基調講演の講師は九州大学大学院准教授の元兼正浩氏、タイトルは「次世代スクールリーダーの育成」であった。教育改革という果てしない階段をどんな目的で何に向かって上るのかを考える必要があるとし、そこから、次世代スクールリーダーとは何か、あるべき姿が見えてくると話された。曖昧な組織体としての学校において、管理職やミドルリーダーとしてその役割に何が期待されているのか、100年後に学校が生き延びられるために、

「変わらないために変わる」ことの必要性と、そのためには、目の前の子どもの現実から出発し、教職員が一枚岩になるマネジメントの必要性を強調されていた。次に、ピアノとチェロの共演で至福の時間を過ごした後、シンポジウムに移り、4人のシンポジストがそれぞれの立場から話題提供をされた。仙台北百合女子大学人間学部長の牛渡淳氏は、スクールリーダー(校長)の専門職基準についての日米の取組、大阪市立花乃井中学校校長の宮田逸子氏は、新しいスクールリーダーの役割として学校経営三原則や仕事以上の仕事についての自身の信念と取組、大阪府立刀根山支援学校校長の浅田明子氏は、年齢構成から見る次世代スクールリーダー養成の必要性とリーダー育成のための取組(大阪府教育センター及び大阪府立高等学校校長協会の研修の紹介)、大阪教育大学教授の大仲政憲氏は、自身のこれまでの歩みを通してスクールリーダーの学びの場の必要性などを話された。現職教員の大量退職の時代を迎え、学校がその使命を十分果たしていくために、次世代スクールリーダーの育成は喫緊の課題であることを改めて実感することができた。

最後に、全体を通じて感じたことを述べてみたい。事例校の実践(午前中のケースメソッド授業)を素材として、参加者が共に研究協議し、学び合うことを主眼としている大阪教育大学の取組は、福井大学教職大学院とはまたひと味違った切り口で、その地域に根ざした展開を見せていた。大阪府教育委員会・大阪市教育委員会との連携やシステム面では様々な課題も感じられたが、それらを越えて、課題意識のある人たちがこの地域の教育を変えていこうという意気込みが感じられ、いろいろな意味でパワーをいただいた半日であった。

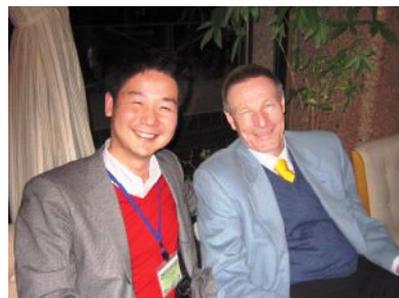
## 世界授業研究学会国際大会に参加して

福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター 遠藤 貴広

2011年11月26~27日、東京で開催されたThe World Association of Lesson Studies International Conference 2011(世界授業研究学会2011年度国際大会)に参加した。授業研究(Lesson Studies)は今、アジアで大ブームとなっており、特にシンガポールからの参加者は約160人。また、スウェーデンから約30人が参加するなど、ヨーロッパからの参加者も多かった。震災の影響で、特に海外からの参加者が少ないのではないかと懸念もあったが、日本発の授業研究に関する日本での大会ということもあり、とても国際色豊かで活気あふれる大会となった。

最初の基調講演では、ヘルシンキ大学(フィンランド)のユーリア・エンゲストローム氏(写真:右)が

「Going Beyond Dialogism in Learning and Instruction: Lesson for Lesson Study(学習と指導における対話主義を越えて―授業研究への教訓―)」という演題で講演を行った。特に印象深かったのは、対話的授業(dialogic teaching)が流行する中で



活動の対象 (objects) が見失われつつあることへの憂慮。対象なき活動はありえないというレオンチェフ以来の立場から、新たな発達の次元をめぐる論点が、教室での授業場面や大学図書館での具体的なやりとりを例に示されたことが興味深かった。

その後も、授業研究をめぐる世界的状況について、講演やシンポジウムが続いた。気になったのは、世界的に授業研究の量的拡大が進む一方で、その質の吟味がまだまだ足りないこと。そんな中、福井市至民中学校と福井大学教育地域科学部附属中学校の実践研究のスタイルが日本の先進事例として紹介され、「Fukui」が世界の実践研究をリードしつつあることも実感した。この大会で、「Fukui」は「Tokyo」の次に多く登場した日本の地名である。

私 (遠藤) もポスター・セッションで発表を行った。発表タイトルは、「Reconstruction of Teacher Education as Cultivating Professional Learning Communities: A Case of the Undergraduate Curriculum of Teacher Preparation Program at University of Fukui」。専門職として学び合うコミュニティを培うとい

う視点から教師教育の再構築が求められている世界的状況の中で、福井大学教育地域科学部の教職課程でどのような教員養成カリキュラム改革が行われているのかを報告した。幸運にも、ポスターの掲示場所が、総合受付とシンポジウム入口の間の特等席で、たくさんの人に見ていただき、様々なコメントをいただくことができた。「やはり日本はすごいですね」と、福井の特殊事例を一般化してしまう声には気を付けなければならないが、本学部の教員養成カリキュラムを一つのモデルとして世界に示せたのであれば、実践者としてはうれしい限りである。

私以外にも本学から、岸野麻衣、木村優、石井恭子の3氏も発表し、福井大学教員チームの勢いもまた世界に知られたのではないだろうか。



## 米国エッセンシャル・スクール連盟秋フォーラムに参加して

福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター 遠藤 貴広

2011年11月10～12日、米国ロードアイランド州プロヴィデンスで開催されたThe Coalition of Essential Schools Fall Forum 2011 (米国エッセンシャル・スクール連盟2011年秋フォーラム) に参加した。

エッセンシャル・スクール連盟は、1984年にセオドア・サイザーがブラウン大学(プロヴィデンス)に創設した学校改革支援組織で、連盟の共通原理を基盤に全米に独自のネットワークを組織し、時には連邦・州・学区の教育政策にも対抗しながら、草の根の学校改革実践を続けている。例えば、ニューヨーク市イースト・ハーレムに創設されたセントラル・パーク・イースト中等学校は、同連盟最初の加盟校2校のうちの一つで、その改革実践については、創設時の校長デボラ・マイヤー (下写真) の著作『学校を変える力ーイースト・ハーレムの小さな挑戦ー』(北田佳子訳、岩波書店、2011年) によって紹介されており、本学教職大学院在籍者の多くが知るところである。

マイヤー氏はセントラル・パーク・イースト校から異動後、ボストン市に公立学校ミッション・ヒル・スクールを創設している。11月10日、本フォーラムに先立ち、このミッション・ヒル・スクールを訪問した。これは今年6月のニューヨーク出張中、同連盟の地域センターNew York Performance Standards Consortiumのスタッフから聞いた話でもあるのだが、マイヤー氏の教育思想は今、セントラル・パーク・イースト校よりミッション・ヒル・スクールの方に色濃く反映されているという。古びた校舎を間借りしただけの小さな学校ゆえ、物理的な新しさや華やかさは感じられなかったが、とても温かさに満ちあふれた学校に感じられた。多様な人種の子どもたちがいるのはもちろん、貧困にあえぐ家庭・地域で育っている子どもや、特別な支援を要する子どもも多く在籍しているのだが、それが目立たない。学級はすべて複式で、教室に常に多様性が確保され、お互いの差異が織りなす協働が新たな学び合いにつながっているように感じた。マイヤー氏は「教えることは聴くこと」とよく言

われていたが、子どもの声を深く聴く同校教師の姿にも驚かされた。そして何より、現校長アイラ・ガヴィンズ氏が学校で最も謙虚に見えたのが印象的だった。

11月11～12日の本フォーラムは興奮の連続だった。特に今大会は連盟創設地プロヴィデンスで開催され、しかも会場となったのはデニス・リッキー氏が創設したメット校。リッキー氏は連盟創設時のもう一つの加盟校セイヤー中・高校の校長だった方で、その学校改革実践は映画にもなっている。今大会のヒーロー的存在で、最初の基調講演から参加者の心をわしづかみ。生徒によるスピーチやパフォーマンスも圧巻。もちろん、メインのセッションも。私のような初参加者もうまく対話に入れるような様々な仕掛けが準備され、105分刻みのセッションもじっくり議論するのにちょうど良い時間枠。日本人参加者は私だけで、大会スタッフから「日本と違うでしょ」と言われたが、感覚的には本学教職大学院のラウンドテーブルの持ち方と類似していて、むしろその共通性に驚かされた。

本フォーラムでは前述のガヴィンズ氏とも一緒になり、幸運にもミッション・ヒル・スクールの教員やその御子息を交えた夕食会に誘っていただいた。夕食後も、御子息を伴っていない同校の教員たちとバーで一杯飲みながら、いろいろな話をする事ができた。翌日の昼食も一緒に、ミッション・ヒルの方々とは本当に家庭的な時間を長く持たせていただいた。

なお、今回のアメリカ調査は、科学研究費補助金(基盤研究B)「ポスト近代社会における(新しい能力)概念とその形成・評価に関する研究」(研究代表者: 松下佳代) によるもので、本フォーラムへの参加のほか、ハーバード大学等での資料収集も実現した。記して御礼申し上げたい。



## 英訳プロジェクトの紹介

福井大学教職大学院特命助教 隼瀬 悠里

本年度から、福井大学における取組を世界に発信すべく、英訳プロジェクトに着手することになった。プロジェクトを実行するに当たり、昨年度まで本学で勤務されていた篠原先生も含めて5名の若手研究者にも御協力いただいている。後に自己紹介していただくが、これらの方々には英訳プロジェクトのみならず、福井大学教職大学院の取組をより深く理解していただくためにも合同カンファレンス等にも参加していただき、サポートしていただいている。

プロジェクト第一弾として、21世紀の教師教育の在り方への提言として福井大学教育地域科学部教授会によって2000年から3度にわたって出された見解を翻訳した。これらの見解では、地域に根ざし、生涯学習機関として開かれた大学として教師教育を展開することの必要性が提起されている。そして、教職大学院の前身である学校改革実践研究コースの取組を事例に、学校における省察的実践・改革のための実践研究を学校・行政・大学の協働とネットワークによって支えていくモデルへの転換も提起されている。

遠藤報告で紹介されている世界授業研究学会(WALS)でこの翻訳版を配布したところ、250人以上の参加者が持ち帰った。学力だけではなく、子どもと共に学び合う素晴らしい教師集団を誇る“Fukui”を今後とも世界に発信すべく取り組んでいく所存である。



滋賀県立大学人間文化学部准教授 篠原 岳司

4月から滋賀県立大学に務めている篠原岳司です。本年度からは学外の立場で、毎月の合同カンファレンスを中心に教職大学院のコミュニティに参加しています。さて、私の専門である教育行政学、教育経営学、そして教育制度の研究領域では、教育実践を基盤とした理論と、それを解明し、発展させる実践研究の方法論が未成熟であるために、現代の教育改革と様々な教育現象を前に具体性を持ってない、致命的な課題があるとの認識があります。しかし、私にとっての福井大学教職大学院の協働実践研究のコミュニティは、その難

題を難題と思わず、学際的な思考を燃え上がらせ、明日への意欲をかき立てる場であり続けています。今年度からの英訳事業や、有志で立ち上げた協働実践研究会(CoPARE)も通じ、日々、自己への問いを深め、次の実践研究にトライすることがまた、コミュニティと共時的で相補的な自己を再認識し、協働の価値を更につかみ直す過程となるでしょう。そんな学びを皆さんと継続させていけたらうれしいです。今後ともよろしくお祈りします。

### 福井大学の諸実践における子どもたちの印象的な姿

東京大学大学院生 鈴木 悠太

子どもたちの姿がどれほど多面的であることか。その多面的に煌めく姿が私の心に印象深く刻まれています。

英訳プロジェクトに参加させていただくことを通じて、子どもたちの様々な姿に出会ってきました。それは、附属中学校、附属小学校の研究授業で直接出会った子どもたちの姿をはじめ、毎月の合同カンファレンスでの語り合いの中で描出される子どもたちの姿や、長期実践報告において叙述されている子どもたちの姿、さらに、教職大学院やその前身である学校改革実践研究コースの設立を構想し展開させてきた実践においても、常に、子どもたちが活躍する姿が想起されま

した。

それらの一つの原石とも言える探究ネットワークでの子どもたちの姿にも魅了されました。すべての教室において、子どもたちの活動のリズム、それに伴走する学生の姿、それらを支える福井大学の先生方の姿、そして、これまでに積み重ねられてきた実践が作り出しているトーンが、濃密な時間と空間を作り出していました。

この半年を振り返り、思い起こされるのは、時にうつむき、時に澁刺と、時にくすみ、時に凜と輝く子どもたちの眼差しの数々であり、その多面的な煌めきの中に、福井大学の実践の中心があることでした。

京都大学大学院生 齋藤 桂

こんにちは。京都大学大学院生の齋藤桂です。英訳プロジェクトの一員として、教職大学院の取組を海外にも知ってもらうための翻訳作業に携わっております。教職大学院がどのような背景を持ってつくられたのか、どのような目的を持っているのか、日本語ではすらすら読めてしまいます。しかし、報告資料を英訳する作業を通して、一つ一つの言葉の細かいニュアンスであるとか、その言葉の下敷きとなっている哲学にまで触れることができました。これまで内容を真に理解しているわけではなかったことを恥じるとともに、貴重な経験ができたことをうれしく思います。チームの皆さんとの英訳会議では、「ここで出てきた改革

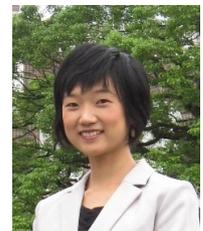
は、reformではなくてreconstruction」,「地域に根ざした、って、どう訳したらいいんだろう」など、毎回とても楽しく、彼らの豊富な知識に刺激を受けています。アメリカの教育を研究する者として、英語をブラッシュアップできる機会に恵まれたことに感謝します。また、合同カンファレンスに参加することなどを通して、現場で御活躍されている先生方や教職を目指している大学院生のお話を直接うかがえることは、大変有意義でありがたいことだと感じています。日本が世界に誇る教職大学院の情報発信の一翼を担うことができれば幸いです。

日本学術振興会特別研究員 遠藤 恵

日本学術振興会の特別研究員（ポストドクター）2年目の遠藤恵です。研究対象はスウェーデンの高校教育で、特に、1970年代以降のカリキュラム改革を検討しています。これは歴史文献の検討を基にした研究ですが、背景にある現実の感覚をできるだけ丁寧に理解した上で研究を進めるため、多くの学校現場を訪れ、教師の話聞き、教員の研修会などに参加することを大切にしてきました。

教職大学院については大学院の先輩によく話を聞いていたのですが、実際に参加すると印象がまた違って、その場に足を運ぶことの意味を徐々に強く感じました。柔らかな姿勢を持ったまま、真っすぐ本質に向

き合い、議論や思考を深めていく空間。その中で人々のつながりが作られていく時間。数回の参加ではありましたが、一つ一つの言葉から、たくさんの学びをいただきました。カンファレンスへの参加に加えて、英訳プロジェクトで背景にある歴史や理論を知れたことで、より深く意義をとらえられたように思います。その貴重な取組を、自らも味わいながら、広く伝えるお手伝いが少しでもできたことに感謝しています。



東京大学大学院生 三輪 聡子

英訳プロジェクトを通して、様々なことを勉強させていただいております。東京大学大学院教育学研究科・教育心理学コース博士課程1年目の三輪聡子です。私自身の研究関心は、小学校の道徳授業における話し合い活動の中で、子どもたちが周りのクラスメイトや教師とかかわり合いながら、いかに道徳にかかわる概念を協同的に生成していくのかという点にあります。道徳の授業のみならず、話し合い活動が取り入れられている授業では、その中でいかに子どもの意見や発話を教師が拾い、授業の文脈の中に意味付けていくのかといった点が授業キーポイントの一つだと思っています。教師による子どもの発話へのかかわり方という視

点からも、教師の専門性とはどのようなものなのか、そして、いかにそれが授業の中から立ち現れてくるのかという問題意識につながります。今回、英訳プロジェクトでは日本語から英語へ言葉を綴り直すという行為の中で、「教師の専門性とは何か、どのようにあるべきなのか」という問いに再度新しい形で出会うことができました。このような形で福井大学教職大学院の取組に携わらせていただくことができましたことを光栄に思っています。



平成24年度福井大学大学院 教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）  
学生募集スケジュール

事前説明会	平成23年12月24日（土）
出願期間	平成24年 1月17日（火）～20日（金）
ガイダンス	平成24年 1月28日（土）
選抜期日	平成24年2月11日（土）
合格者発表	平成24年2月21日（火）

※募集要項は12月上旬に県内全ての学校に発送を予定しています。

問い合わせ先：福井大学学務部入試課 [本学ホームページ <http://www.u-fukui.ac.jp/>]

## 教師教育ネットワーク・交流のひろば

このコーナーは、全国各地で教師教育に取り組んでいる教職大学院や既設大学院等の実践と研究を交流する広場です。今号では、群馬大学教職大学院の取り組みを紹介します。たくさんの投稿を期待しています。

### 群馬大学教育学研究科専門職学位課程教職リーダー専攻

#### ティーム・ティーチングで1+1=3を目指して

群馬大学教職大学院教授 佐藤 浩一

群馬大学教職大学院は平成20年度に発足した。学生定員16名・専任教員13名という小規模な組織だが、優れた若手教員とミドルリーダーの育成を目指して、地道な取組を続けている。

本専攻の特色の一つに、ほぼすべての授業、実習指導、課題研究指導を研究者教員と実務家教員のティーム・ティーチング(TT)で実施しているということがある。TTの授業は決して単純な輪講ではない。すべての回の内容に研究者と実務家の双方が責任を負い、綿密な打合せを重ねながら授業が構成される。筆者は学習心理学・教育心理学・認知心理学を専門とする研究者教員として、元公立小中学校長というキャリアを持つ実務家教員とペアで、「学習支援の課題と実践」といった授業や、「児童生徒支援課題研究」「課題解決実習」の指導に取り組んでいる。その一端を紹介しよう。

#### 1 授業「学習支援の課題と実践」でのTT

発足当初はドキドキの日々だった。研究者というのは現場の実態を余り知らないし、抽象的な話をしがちである(どう具体化するかは皆さん考えてね、と逃げを打つ)。幸い実務家教員が私の話をうまく実践につなげてくれた。そのことは、受講生はもとより私自身にとって、計り知れないプラスになった。

例えば、学習心理学では、先行する学習によって後続の学習が促進されることを「正の転移」と呼ぶ。これは、教育現場にとっても重要な概念である。転移がなければ、人間は何でもかんでも一から学ばなければならないからだ。心理学のテキストを開くと「英語を学んだ経験があると、次のドイツ語の学習にプラスになる」といった例が載っている。「英語の学習→ドイツ語への転移」という流れでとらえるのである。しかし、現場では、これとは逆方向の発想が必要になる。例えば、一つの単元を構想する際に、「この単元の最後には、○○という課題に取り組めるようにしたい」と教師が願っているとしよう。このとき、その前の段階でどういう学習活動を組めば、最終的に○○が可能になるかと考える。つまり、どこに転移させたいかを最初に考え、そこからさかのぼって、先行する学習の在り方を探り、単元全体を構想することが大切なのだ。こうした実務家教員の発想は、受講生以上に研究者教員である私に、強い衝撃を与えた。

#### 2 実習と課題研究指導でのTT

本専攻では、1年次に附属学校園で8日間、公立小中学校で24日間、2年次には実習校(現職教員は勤務校)で30日間の実習に取り組む。特に、2年次の実習(課題解決実習)は、各自が研究課題としている問題に取り組み、その成果を近隣の学校にも公開し、最終的には、課題研究報告書にまとめる重要な実習である。この実習でも、研究者教員と実務家教員がペアを組んで、巡回指導に当たっている。

例えば、あるストレートマスターは1年次の授業で、「自分で自分に説明する」「他者に説明する」活動が学習に非常に効果的であるという、教育心理学の知見を学んだ。そして、こうした説明活動を積極的に取り入れた算数の授業を構想し、2年次の実習に入った。しかし、理論を実践化することは難しい。児童の実態に合った導入をどうするか、本時の内容に入る前に押さえておくべき基礎的な事項は何か、どうすれば積極的な説明が生まれるか、それをサポートする小道具をどう使うか、児童から出された様々な説明をどう整理して扱うか...様々なことを考慮しないと、せっかくの理論や先行研究が実践に生かされない。私たちは何度もペアで実習校に足を運び、教員2名と院生が三人四脚で知恵を絞りながら授業を構想した。時には、実務家教員と院生の二人三脚に、研究者教員が負ぶさったこともあったかもしれない。

#### 3 1+1=3, 1+1+1=4を目指して

「理論と実践の融合」は口で言うほど簡単ではない。立場や背景の違う人間を一つの壺に放り込めば、香り豊かな何かが自然と醸成されるわけではない。社会心理学や認知心理学の研究でも、複数の人間が相談することでかえって課題遂行が妨げられる現象が知られている。TTに取り組んでいる私自身、どういう状態が理論と実践の融合なのか、いまだに分からない。しかし、最近では少なくとも、1+1のTTが2あるいは2コンマいくつかの成果を生み出しているようには思えてきた。1+1のTTが3になるように、そして、院生も含めた1+1+1が4になるように、力を尽くしたいと願う次第である。なお、TTについては、2011年に、「教職大学院におけるティーム・ティーチング実践と評価、今後の課題」として、『群馬大学教育実践研究』28号、pp241-266にまとめている。関心をお持ちの方は、機関リポジトリで検索していただくと有り難い。(https://gair.media.gunma-u.ac.jp/)

## ラウンドテーブル予告



3/3(sat) 12:40-17:40

### 専門職として学び合うコミュニティを培う

For Professional Learning Communities  
日本の教師教育改革のための福井会議 2012

#### session 0 12:40-12:50 会の進め方について orientation

- Zone A 学校：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ
- Zone B 教師教育：生涯にわたる専門職としての力量形成
- Zone C コミュニティ：学び合うコミュニティを培う
- Zone D 教科：教科を問い直す なぜ学ぶのか

#### session I 12:50-13:50 実践交流の広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

ポスターとその場での語り合いを通して、それぞれの実践を紹介します。実践知の交流の広場です。  
Zone A/B/D 1階ロビー Zone C 2階ロビー

#### session II 14:00-15:20 四つの問題提起 方向性を探る symposiums

それぞれのテーマについて、課題と方向性を見定めるための基調報告を共有します。

- A：学習の展開をとらえる力
- B：教師教育改革の展望
- C：地域における自治と学習
- D：授業づくりと評価

#### session III 15:30-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める forums

テーマに沿って少人数で報告を聴き、語り合うフォーラムです。

- A 学校：Careと専門職の学び
- B 教師教育：教師教育改革と組織間連携
- C コミュニティ：持続可能なコミュニティをコーディネートする
- D 教科：教科を問い直す なぜ学ぶのか

3/4(sun) 8:30-14:00

### 実践研究 福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions

#### 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る round table cross sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

#### Session IV 協働探究 展開を語る/プロセスを聞き取る 8:30-14:00

- ①はじめに 8:30-8:40
- ②自己紹介 8:40-9:00
- ③報告Ⅰ 9:00-10:40
- ④報告Ⅱ 10:40-11:40
- ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00 (現段階での予定です。進行表には変更の可能性があります。)

3/4のラウンドテーブルの参加についてのお願いは午前午後全日程(8:30-14:00)の参加をお願いします。  
●ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開をじっくり聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:30-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:30-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いたします。

designed by FukuiKoubou ver.1.0 2011.12.08

# 実践し 省察する コミュニティ

*Fukui Round Tables:  
Spring Sessions  
For Reflective Practice  
And Organizational Learning  
in University of Fukui*

*For Communities of Practice and Reflection Since 2001*

専門職として学び合うコミュニティを培う  
日本の教師教育改革のための福井会議2012  
3/3(sat) 12:40-17:40

実践研究福井ラウンドテーブル2012 spring sessions  
3/4(sun) 8:30-14:00  
福井大学総合研究棟V (教育系1号館)

探究する学びを実現する教師  
教師を支える教職大学院  
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

**2012.3.3-4**  
**福井大学教職大学院**  
大学院教育学研究科教職開発専攻  
共催 福井大学高等教育推進センター・教育地域科学部附属地域共生プロジェクトセンター  
教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム・福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」  
後援 福井県教育委員会

参加申し込みについて

- 申し込みの詳しい方法については福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご覧ください。  
(受付はホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形で行います。受付期間は1月15日から2月17日を予定しています。)
- 3/4のラウンドテーブルの実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。

designed by FukuiKobou ver.1.0 2011.12.08

## Schedule

- 12/24 sat** 教職開発専攻 (教職大学院) 入試事前説明会 (15:00-17:00)
- 12/26 mon -28 wed** 冬季集中講座 (9:30-17:00)
- 1/5 thu-7sat** 冬季集中講座・長期実践研究報告作成 (9:30-17:00)
- 1/28 sat** 教職開発専攻 (教職大学院) 入試ガイダンス (10:00-12:00)

### [編集後記]

年末を控え、多忙な中で原稿を執筆していただいた方々に心から感謝。

3月の東日本大震災は、私たちに様々なこと見直す機会を与えた。家族であり、友達であり、学校であり、地域であり、あるいは、生命であり、仕事であるなど、数え上げたらきりが無い。当然のことが当然でなくなったとき、その当然のことの貴重さが分かるが、人は失ってしか気付かないとすれば、余りにも悲しい。互いに支え合う「絆」を大切にしながら、様々な思いを人類の財産として語り継ぐ一方で、自身の今後の在り方生き方に生かしていく知恵を持ちたい。来る年の幸を心から祈念。(H)

## 教職大学院Newsletter No.37

2011.12.26発行

2011.12.26印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1  
dpdfukui@yahoo.co.jp